

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18H02227

研究課題名(和文) 里山における自然資本の意識化とネットワークのための地域参加型研究

研究課題名(英文) Community-based participatory research for consciousness of natural capital and networks in satoyama

研究代表者

深町 加津枝 (Fukamachi, Katsue)

京都大学・地球環境学堂・准教授

研究者番号：20353831

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,800,000円

研究成果の概要(和文)：滋賀県大津市比良山麓の里山の自然資本の意識化とネットワークの創出のため地域参加型研究をふまえ、自然資本を自立的に再生、活用する空間計画と地域デザインを行った。意識化においては、参加型研究の拠点となる古民家を活用した調査やワークショップを積み重ね、意識化やネットワーク化に重要な要因、プロセスを明らかにした。また守山石、アブラボン、湖魚料理、近州首頭など地域のシンボルとなる有形・無形の自然資本と地域の関わりを創出、継続するデザインを検討し、持続的な活用のための仕組みづくりを行った。さらに、森・里・水辺の自然や文化をつなぐ里山回廊、地域ネットワークとして視覚化し、地図やプログラムとして提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多様な分野からの研究者と地域社会の構成員との間の対等な協働によって生み出された実証的なデータが蓄積され、里山の多様な自然資本の意識化に関わる要因とプロセスが解明された。里山の有形・無形の自然資源の価値を抽出、視覚化し、ネットワーク化することにより、持続的な管理、活用につながる道筋、地域社会が主体的に自然資本関わるプログラムや仕組みが検討され、社会的な実装につながる科学的知見として示された。

研究成果の概要(英文)：Based on a participatory research project in the satoyama at the foot of Hira Mountain in Otsu City, Shiga Prefecture, we conducted spatial planning and community design for the independent regeneration and utilization of natural capital in order to raise awareness and create a network of natural capital. In the process of raising awareness, we conducted a series of surveys and workshops at an old folk house, which served as a base for participatory research, and clarified the factors and processes important for raising awareness and creating a network. We examined designs that create and sustain relationships between tangible and intangible natural capital that serves as a symbol of the community and the community, and created a mechanism for sustainable utilization. Furthermore, the project was visualized as satoyama corridors and regional networks connecting the nature and culture of the forest, village, and waterside areas, and presented as maps and programs.

研究分野：景観生態学

キーワード：里山 自然資本 意識化 ネットワーク 地域デザイン 社会実装

1. 研究開始当初の背景

日本の里山には、身近に多様な自然資本が存在し、生活、生業の中で利用されてきた歴史がある。自然資本は、森林、農地、水など、自然によって形成される資本であり、自然資本から生み出される恵みは生態系サービスとして捉えられる。今日の里山では、人口減少や高齢化、森林や農地の管理放棄、無秩序な開発が深刻化しており、水源涵養機能や防災機能、生物多様性の保全機能の低下など、自然資本としての価値が喪失、劣化している。このような問題を解決する方策の1つとして、共同により実質的な里山の利用管理を行うコモンズの議論が進展し、自然資本的対策（生態系による対策）は災害発生前の対策の1つとして位置づけられる。今後、里山の保全管理に投入する資金や人的資源などを効率的に拡大し、防災・経済社会分野、環境保全の分野など多様な分野間で意識共有、連携する必要がある。

里山には多様な自然資本が分布し、それぞれがつながりをもちながら文化的、生態的なネットワークを形成してきた。こうしたネットワークの機能を物理的、精神的に高める役割を果たしてきたのが、歩道、街道、水路などの「道」であり、古くからの文物や人々の交流の舞台、祭りや信仰など精神性と結びついた場となってきた。また、道路や水路は地域内外をつなぐ共同管理空間となり、地域の自然資本を適正に管理する骨格として機能してきた。自然災害の多い日本では、災害時における周辺地域とのネットワークの重要性が指摘されている。例えば、東日本大震災時に山道が人や物資、情報等の緊急輸送路として活用された報告がなされている。多様な形態で存在する自然資本をソフト、ハードの両面からネットワーク化し、持続的な管理、活用につながる道筋を検討する必要がある。今日に求められる道とは何か、道の持つ意味、役割、可能性を問い直し、地域に根差した道のネットワーク機能を提示するのである。自然資本の価値を適切に評価し、管理していくことは、生活や生業の安定化、企業経営の持続可能性や自然災害に対する対応力を高めることにつながる。しかしながら、身近に存在する自然資本の価値を認識するのは容易でなく、日常生活においてその価値を高めるための実践につながる実証的なデータによる「自然資本の意識化」が不可欠である。今後、自然資本の考え方が、地域、NPOなどの市民活動なども含む幅広い分野で取り入れられ、意思決定の場などで活用していくことが期待されている。

2. 研究の目的

本研究では、里山における「自然資本の意識化」と「ネットワークの創出」にむけた「地域参加型研究」を行い、地域社会にある里山の自然資本を自立的に再生、活用するための具体的な空間計画、地域デザインを検討することを目的とする。「地域参加型研究」とは、Community-Based Participatory Researchの1つであり、生活、生業に直接関わる地域住民と研究者間での相互作用に主眼を置いた方法である。「自然資本の意識化」では、自然資本に対する意識化のプロセス、意識化において重要な要因を明らかにし、自然資本に関わる現在および将来の社会的課題の解決に向けた「自然資本の意識化」を行う。「ネットワークの創出」においては自然資本をいかにネットワーク化するか、多様な道をもつネットワーク機能を包括的に分析、評価し、自然資本の持続的な管理、活用につながる道筋を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究における主な対象地を、地形的に西と東を繋ぐ位置にあり、日本の結節点としての役割を果たしてきた滋賀県大津市比良山麓に位置する里山とした。まず、自然資本として重要な要素を把握し、空間特性、生態機能、地域社会との関係を分析するために、江戸期からの絵図や明治期以降の地形図を用いて土地利用や景観構成要素、植生の特徴を把握し、聞き取り調査、アンケート調査を行った。アンケート調査は、大津市八屋戸の守山集落を対象とし、目に浮かぶ風景や耳に残る音、手足によみがえる感覚、思い出の味などのふるさと五感体験、及び地域自慢（風景など）から読み取れる環境観に関する項目で構成した。また、谷水や井戸水などの地域在来水源の水利用の調査を実施し、その特徴と水利用の関係について把握した。地域参加型研究を進めるための拠点を活用し、現地調査、参与観察を行い、自然資本に関する伝統的な知識・技術とそれらを現代に活かす新しい知識・技術の情報を整理した。そして、自然資本としての価値や課題を共有し、地域のシンボルとなる自然資本の意識化を進めるための検討を行った。その上で、地域住民、市民組織などが里山の自然資本との継続的な関わりを継承、創出するためのフィールドワークやワークショップを実施するとともに、意識化に重要な要因、プロセスを検討した。以上をふまえ、里山における個々の自然資本をつなぎ、ネットワークとして機能させるための「里山回廊」を視覚化し、具体的なプログラム、仕組みとして提示し、社会実装につなげた。

4. 研究成果

(1)比良山麓の里山の土地利用とその変化

比良山麓の江戸～明治期の土地利用を見ると、集落付近の森林は主にアカマツ林、高標高域は落葉広葉樹林で覆われ、山から湖岸を結ぶ多数の道や水のネットワークがあった。南小松集落の村絵図（1650年頃作成）からは村のメインストリートである北国海道沿いに3つの集落があったことが読み取れる。田畑は集落周辺から湖へ向かって広がり、山からは大谷川など複数の川が流れ、南東には内湖や湖が広がっていた。大谷川上流では、川が分けられている様子が描かれ、本流から用水を引いていた。内湖には「よし原」と書かれており、ヨシが繁茂し、人々が生活などに利用し、内湖は港や漁業の場として機能していた。「永荒」の文字が書かれた範囲の「荒流」は荒地を表していた。山や湖からの洪水や土砂災害を受け、人々は表現を使い分けて自然災害を細かく認識していた。江戸後期になると内湖の湖岸に新田の開発やシシ垣が建設されるなどの変化があった。

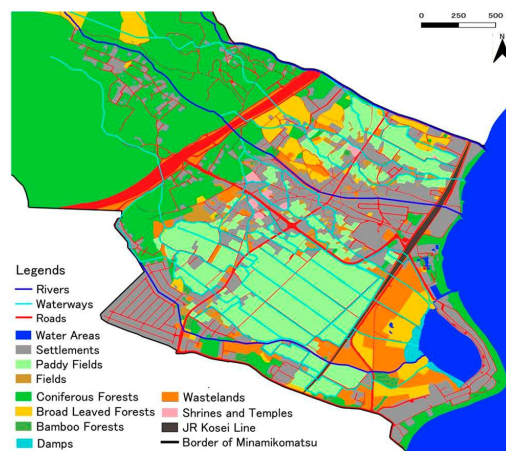


図1: 2018年の南小松の土地利用

図1に2018年の南小松の土地利用と水のネットワークを示す。今日の南小松における自然資本の価値や人との関わりの特徴として、1)白砂青松の景観（琵琶湖八景のひとつ「涼風 雄松崎の白汀」、琵琶湖周航の歌など）、湖 - 白砂青松 - 内湖 - 里 - 山なみの連続性、2)内湖特有の景観構造が維持されている数少ない自然環境（湿地の希少種）、3)水辺レクリエーションの先駆け（歴史ある水泳場・キャンプ発祥地）、4)漁業やヨシ刈り等の生業の場、5)入会地管理会や自治会による主体的な管理、6)市民組織によるヨシ刈り、たらい船など保全・活用の新たな動きがあることが明らかになった。

(2)比良山麓の住民の五感体験と環境観

アンケート調査の結果、「五箇祭」などの目に浮かぶ風景や耳に残る音、なつかしい匂い、手足によみがえる感覚、「湖魚料理」など思い出の味、キノコの「あぶらぼん」と聞いて思い出すことなどが明らかになった。住民の環境観は、「眺望景観」「共同体」「場所」「水・水辺」「信仰・祭礼」「地域景観」「自然・生態」「食文化」「気候・風土」「音風景」「交通・土地利用」の11カテゴリに分類できた。図2は、各世代の一人当たり平均カテゴリ論及率を求め、その世代間比較を示した。直接的な自然体験への論及が多い40代、共同体への論及が増えてくる60代、各方面への目配りがきいている70代、信仰・祭礼等地域の伝統について語る80代といった、世代間的傾向が見られた。「眺望景観」に関するエピソードが際立って多く、「琵琶湖と月」眺望景観が特に印象的なものとして挙がっている。また、集落の裏山（蓬萊山、比良山）の雪景についてのエピソードもあった。これらは個人的な記憶であると同時に、新古今集に歌われた景であり、また近江八景の一景（比良暮雪）でもある。「眺望景観」は記憶としてではなく、現前性のあるものとしてエピソード化されているが、同時にこうした時間を超えた景観体験があることは、際立った風土的特徴である。「共同体」においては地域の人々の相互の、あるいは外部からの移住者との親和的な関係が高く評価されている。「自然・生態」「食文化」「水・水辺」については、現前するものとしてより「記憶」として語られる傾向がある。「地域景観」を特徴づけるものとして「守山石」「石積み」が多く挙げた。伝説や歴史、個人的な経験などによって固有化された、多くの「場所」が存在していた。「水・水辺」については他のカテゴリと関連するものが多く、水の環境要素としての多面性がうかがわれた。「音風景」には、生き物の出す声が多く挙げられている。「食文化」は採集体験を通じて「自然・生態」との関わりが強うかがわれた。「気候風土」では、「空気のきれいさ」「風の強さ」「虹」「雪」に触れたものが見られた。「自然・生態」「食文化」「水・水辺」など、個人の生活史のなかで過去と関連づけられ、「記憶」として語られるものがある一方で、ひろがりのある「眺望景観」や「音風景」など、今の生活の中で体験できる、「現前するもの」が数多く挙げられていることが印象的であった。中でも、「琵琶湖と月」「比良山の雪」など、今日においても印象深く体験され続けている場面が、同時に歴史的なものでもあることは、この地域の風土を強く特徴づけていた。

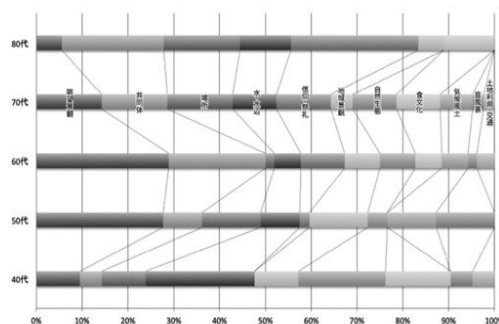


図2：世代毎の各カテゴリへの論及傾向
下村泰史「大津市八屋戸守山地区江州音頭ワークショップで得られた地域住民の環境観」より引用

(3)比良山麓の水環境

表1は、大津市八屋戸守山集落の地形など自然環境に基づき形成された今日の水環境と人工的な水環境を示した。守山集落には川水・湧水・湖水の3つの自然環境由来の水源があり、川水は集落の北側には土石流危険渓流である野離子川が、南側には地荒谷川、八屋戸川が流れている。湧水は湖西線に沿って多く湧水地点があり、複数箇所から湧き出し、地表や水路へ浸み出して湧水群や湧水池、湧水湿地を形成していた。人工的な水環境としては、川水から引水し生活や農業用水として利用する用水路と山水を農業用・防火用に利用するため池があった。琵琶湖総合開発を機に昭和30年頃に行われた琵琶湖を水源とする整備された開発型の揚水かんがい用水、地下水を水源とする揚水用水があるなど、多様な水形態があった。

集落内を通る用水路は民家の敷地内を通り、下流域では農業用水に使われ、琵琶湖へと注ぐ。用水路は川水だけではなく、下流への途中で琵琶湖かんがい揚水が流入する。揚水が供給され水量が増えた水路を下ると、次に湖西線付近からは農地や湧水池から浸み出した湧水が流れ込み、琵琶湖に注いでいた。山から湧き出す水は、大道川用水の取水口付近の金刀比羅神社のそばから湧き出す「水坂の水」と集落の北側、国道より山手にある個人所有山の山水「頓狩石の水」がある。絶えることなく水が湧き出しており、水質が良いことから飲料水として親しまれている。守山集落の水環境は、野離子川から引水した用水路が琵琶湖揚水や湧水の多様な水を取り入れ、山集落田湖をつなぐ空間であることが示された。また、集落・耕作地を通り、人々の暮らしに近い水景観があり、水源の違いで用途・活用の形態に多様性が生まれていたことが明らかになった。河川や水路のネットワーク化は局所的となっているため、広域スケールへの展開をどのようにしていくかが課題であることが示された。

分類	水形態	名称	水利用方法			
			生活	農業	防災	信仰
地形など自然環境に基づき形成された水環境	川水	野離子川				●
		八屋戸川				●
		地荒谷川				●
	湧水	釜水(ショウズ)	●	●	●	●
		野離子	●			●
人工的な水環境	揚水	大道川(ダイドガワ)	●			●
		釜田川(カマダガワ)		●	●	
		結田川(ハヤシダガワ)		●		
		中川(ナカガワ)			●	
		市川(イチガワ)			●	
		琵琶湖川(ハヤシキガワ)	●	●		
		谷の川(タニノガワ)			●	
		野川(ノカガワ)	●	●	●	
		浜川(ハマミヅガワ)	●	●		
		八屋戸川(ハヤシガワ)	●	●		
	池水	釜田の「クドメイケ」	○	○		●
		防火水池(4箇所)				●
	揚水	琵琶湖揚水かんがい用水		●		
		地下水揚水A				●
		地下水揚水B				●
琵琶湖	頓狩石	●				

表1：守山集落の水環境

(4)里山の自然資本を活かすためのプログラムと仕組み

比良山麓の市民活動の特徴として、森林や農地、水路、河川、内湖など様々な場が対象となっていること、地点、集落、比良、比良比叡といった異なるスケールを対象にした活動があった。そして、石材や樹木など自然資源を活かした活動や自然再生が進展しつつあり、歴史・文化、防災の視点を活かした活動については地元が中心となる一方、水辺の活動では複数の主体間での連携がみられた。また、行政に多くを依存することなく地域の自治組織が中心となって利用拠点の管理運営を担う集落もあったが、時代の変化、利用者ニーズの変化の中で様々な課題を抱えており、新たな展開が求められていた。今後は、地域の自然と文化資源を活用した利用形態の多様化(夏季集中から通年利用へ、点から線・面へ)、内湖などの生態系の保全・再生と利用プログラムの連携、地域-行政-市民組織-研究者等の新たな協働のガバナンスなどが重要になると考えられた。道に関する活動と今後の課題としては、自然資源を横につなぐ活動が中心で、縦のつながり(湖岸から山頂)に関わる活動は限定されること、ルート設定や散策が中心で管理体制が不十分となり、道のネットワーク化のための連携の構築が挙げられた。そこで、地元の自治会や市民組織と連携し、暮らしや信仰などに関わる水辺や石の文化に関わ



写真1: 古民家五郎助を活動拠点として再生・活用した(床板に柿渋を塗るワークショップ・「五箇祭展」・「かまどを使った里山食事会」・「民具展示 守山むかしの暮らし展」(撮影:永江弘之)

る里山ランドスケープの構成要素を抽出し、ネットワーク化に向けてワークショップを行い、

マップ作成など意識化、視覚化のための地域参加型でのプログラムを構築した。地元の古民家を地域コミュニティの交流の場、活動拠点として整備した上で、五感体験と関わりの深い祭りや民具、キノコ、水辺などの題材を用いたフィールドワークを開催し、映像や写真などによる記録と視覚化を行った（写真1）。さらに、「五箇祭展」や「守山むかしのくらし展」を開催し、実際の「モノ」、「写真・映像」「生の語り」、食文化などの「体験」を提供することを通し、プログラムの実践と有効性の検討を行った。また、近江地域の伝統的な盆踊り唄である江州音頭のフォーマットを生かした自然資本を演じるためのワークショップを行った。地域住民とともに記憶を出し合って作詞を行い、唄と踊りが一体となった「守山自慢江州音頭」としての作品化につなげた。こうしたプロセスを通し、地域住民と共に地域に顕在・内在する価値や課題を認識し、意識化に重要な要因として、五感体験や現場での知識や経験の共有が重要であることを明らかにした。

(5)自然資本の意識化とネットワーク化

地域参加型研究の枠組みの中で、「あぶらぼん」、「カワト」、「長五郎岩」、「内湖」など、地域ごとに特徴ある自然資本を今後に向けて継承、再生するための仕組みや具体的なプログラムを検討した。そして、地元の自然・歴史・文化的価値のある造形物や景観について意識化するため、学校や地域の活動での使用を想定したスタンプラリーのコース設定や里山資源カードを用いた学習、体験プログラムのデザインを行った（図3・4）。ポイントの選択には文献調査、現地調査、聞き取り調査を行ない、暮らしと結びついた多様な自然資本を内包した「年中行事コース」「防災の歴史コース」「水をめぐる歴史コース」などを設定した。地域住民がスタンプラリーに参加することにより、場所や人と出会い、その体験を当日だけで終わらせることなく、情報を共有し、地域での活動につなげるための検討を行い、自然の恵みと災いに対処した知恵や技術、地域に残る伝承などを段階的に学習できるプログラムとした。コロナの影響で多くの地元行事が制限された中ではあったが、2021年11月に守山集落において、成果物であるスタンプラリーを用いた自治会行事が実施され、地域を知り、交流できるプログラムとしての意義が検証された。

比良山麓の里山の自然資本に関連する情報を統合し、ネットワーク化するツールとして、石の文化と水系に注目した山の辺、湖辺の里山回廊を地域参加型ワークショップを通して検討した。産出される石を使用した様々な造形物、山水を利用した水路、小河川など多様な景観を通して地域に伝わる知恵や技術、自然と向き合い共生してきた暮らしなどを認識する里山回廊の重要性が共有され、「比良山麓石の文化マップ」として視覚化された。また、石の文化に関する研究成果については、集落ごとに特徴のある石材、加工法などが明らかになり、地元でのワークショップや企画展示により石の文化の多様性が意識化されるとともに、成果の一部は滋賀県立琵琶湖博物館の常設展示として活用されている。

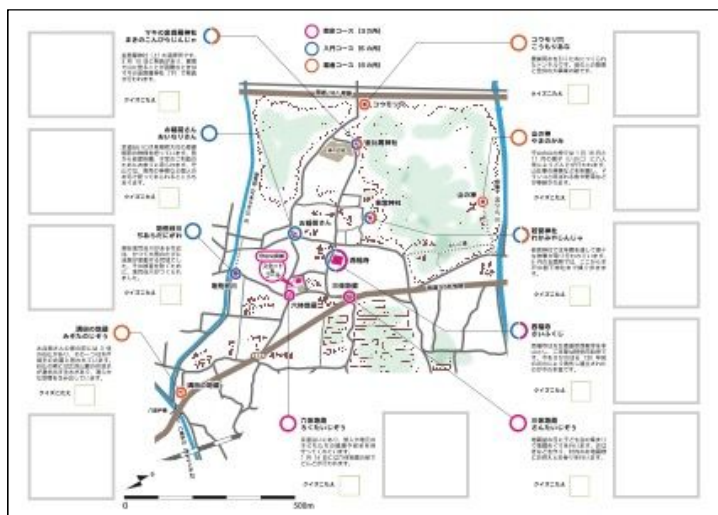


図3:スタンプラリー台紙(ポイント解説、イラスト地図、地域の歴史・自然クイズを掲載)
「里山における自然資本の意識化とネットワークのための地域参加型研究の報告」より引用



図4:守山の自然資源をテーマにしたスタンプ
「里山における自然資本の意識化とネットワークのための地域参加型研究の報告」より引用

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Fukamachi Katsue 46	4. 巻 46
2. 論文標題 Building resilient socio-ecological systems in Japan: Satoyama examples from Shiga Prefecture	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Ecosystem Services	6. 最初と最後の頁 101187-101187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.ecoser.2020.101187	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Ando Koichi, Fukamachi Katsue, Miyoshi Iwao, Ochiai Chiho, Takahashi Hiroki	4. 巻 2
2. 論文標題 Changes in Water network Management since the Meiji Era and Issues Regarding Disaster Prevention at the Foot of Mt. Hira in Shiga Prefecture, Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Environmental Information Science	6. 最初と最後の頁 43-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11492/ceispapersen.2021.2_43	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 永江弘之・大原 歩	4. 巻 11
2. 論文標題 「里山における自然資本の意識化とネットワークのための地域参加型研究」の報告	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 成安造形大学附属近江学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 25-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 下村泰史	4. 巻 24
2. 論文標題 大津市八屋戸守山地区江州音頭ワークショップで得られた地域住民の環境観	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都芸術大学紀要	6. 最初と最後の頁 120-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安藤滉一・深町加津枝・東幸代・高橋大樹	4. 巻 83(5)
2. 論文標題 大津市南小松の絵図に基づく江戸期から明治初期までの土地利用と災害対応	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ランドスケープ研究	6. 最初と最後の頁 485-490
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5632/jila.83.485	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺圭一	4. 巻 13
2. 論文標題 「はげ山」研究の新しい論点	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代民俗学研究	6. 最初と最後の頁 78-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤暖生	4. 巻 65
2. 論文標題 食用植物・キノコの採取・利用にみる森林文化：文化的要素の抽出および文化動態の解釈の試み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 林業経済研究	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20818/jfe.65.1_15	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 楊書偉・落合知帆・深町加津枝	4. 巻 85(5)
2. 論文標題 近江石工・西村嘉兵衛の蓮華寺燈籠と奥の院燈籠の形態的特徴と技術	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ランドスケープ研究	6. 最初と最後の頁 381-386
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5632/jila.85.381	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神代栄理子・深町加津枝・神代圭輔・高橋大樹	4. 巻 85(5)
2. 論文標題 明治期の材木売上帳にみる琵琶湖西岸地域の森林資源の用途別流通	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ランドスケープ研究	6. 最初と最後の頁 405-410
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5632/jila.85.405	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Fukamachi Katsue
2. 発表標題 Traditional knowledge and Eco-DRR of satoyama landscape on the west side of Lake Biwa, Japan
3. 学会等名 International Consortium of Landscape and Ecological Engineering 9th Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 深町加津枝
2. 発表標題 大津市比良山系の古地図から読み解く水系管理の伝統知
3. 学会等名 第66回日本生態学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 深町加津枝
2. 発表標題 滋賀県比良地域の里山における市民活動と自然資源のネットワーク化
3. 学会等名 第130回日本森林学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安藤滉一, 深町加津枝, 高橋大樹, 東幸代
2. 発表標題 大津市南小松の絵図に基づく江戸から明治初期の土地利用
3. 学会等名 第130 回日本森林学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡辺綱男
2. 発表標題 自然共生社会とSATOYAMAイニシアティブ
3. 学会等名 日本湿地学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高林萌, 山口敬太, 川崎雅史
2. 発表標題 東近江市奥永源寺における山村の水利用
3. 学会等名 第10回文化的景観研究集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡部圭一
2. 発表標題 石工の採石労働にみる山の環境と資源管理 - 近江国滋賀郡北比良村を事例に
3. 学会等名 日本民俗学会第71回年会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡部圭一
2. 発表標題 琵琶湖内湖における複合生業の形成 - 近代の漁業組合文書にみる筍の普及過程を例に
3. 学会等名 日本民俗学会第73回年会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 深町加津枝
2. 発表標題 滋賀県における今日の災害対応と伝統・地域知
3. 学会等名 日本生態学会第69回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 敷田美玖・深町加津枝
2. 発表標題 滋賀県大津市近江舞子内湖の保全利用に対する地域住民の意識
3. 学会等名 日本生態学会第69回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Walton Gavin, Fukamachi Katsue, Miyoshi Iwao
2. 発表標題 Factors Influencing Wetland Vegetation Along the Sunaji River in Minamikomatsu, Otsu City, Shiga
3. 学会等名 日本生態学会第69回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小木曾遼・深町加津枝
2. 発表標題 比叡山大宮川上流部における溪流沿いの植生
3. 学会等名 第133回森林学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 日本景観生態学会（深町加津枝ら）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 共立出版	5. 総ページ数 272
3. 書名 景観生態学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	齋藤 暖生 (Saito Haruo) (10450214)	東京大学・大学院農学生命科学研究科（農学部）・助教 (12601)	
研究分担者	永江 弘之 (Nagae Hiroyuki) (50367885)	成安造形大学・芸術学部・教授 (34201)	
研究分担者	下村 泰史 (Shimomura Yasushi) (70351369)	京都芸術大学・芸術学部・准教授 (34319)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	渡辺 綱男 (Watanabe Tsunao) (70774553)	国際連合大学サステナビリティ高等研究所・サステナビリティ高等研究・シニア・プログラム・コーディネーター (82691)	
研究分担者	渡部 圭一 (Watanabe Keiichi) (80454081)	京都先端科学大学・人文学部・准教授 (34303)	
研究分担者	山口 敬太 (Yamaguchi Keita) (80565531)	京都大学・工学研究科・准教授 (14301)	
研究分担者	大岩 剛一 (Oiwa Goichi) (40309042)	成安造形大学・未登録・研究員 (34201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関